

# 二枚の小判

野村胡堂

## 一

「親分の前だが――」

ガラッ八の八五郎は、何やらニヤニヤとしております。

「前だか後ろだか知らないが、人の顔を見て、思い出し笑いをするのには罪が深いぜ。何をいったい思い詰めたんだ」

銭形の平次は相変らずこんな調子でした。年を取っても貧乏しても気の若さと洒落気しやれつけには何んの変りもありません。

「ね、親分の前だが、褒美ほうびを貰ったら何に費つかおうか、あつしはそれを考えているんで」

「褒美？」

「忘れちゃいけませんよ。近ごろ御府内にチヨイチヨイ贋金にせがねが現われるんで、その犯人を挙げた者には、たいそうな御褒美を下さるといふ御触れおふじゃありませんか」

「なんだその事か、――そいつは取らぬ狸たぬきの皮算用かわざんようだ。当てにしない方が無事だろうぜ」

「でも、万一ということがあるでしょう。あつしがその偽金造りを捕えたら、どうなるでしょう、親分」

「たいそうな氣組だが、――まア諦あきらめる方が無事だろうよ。半年越し江戸中の岡っ引が、鵜うの目鷹たかの目で探しても、尻尾をつかませない相手だ」

「でも――」

「万一なんてことがあるものか、谷中の富籤とみくじじゃあるまいし」

「谷中の富籤ほども分がありませんかね、親分」

「まア、そんな事だろうよ」

銭形の平次が諦めて<sup>あきら</sup>いるほど、その贋金遣いは巧妙<sup>こうみょう</sup>を極めました。

そのころ横行した贋金<sup>たぐ</sup>というのは、所謂銅脈<sup>いわゆる</sup>といった種類で、銅の台に巧みな金鍍金<sup>きんめつき</sup>をほどこした細工物で、素人目には真物の小判と鑑別<sup>かんべつ</sup>がつかなかったばかりでなく、贋造貨幣<sup>がんぞうかへい</sup>犯人の一番むずかしい使用法が巧妙で、江戸中の恐怖になりながらも、容易にその根源<sup>こんげん</sup>を探らせなかったのです。

「あの――」

そんな夢のような話を話しているガラッ八の後ろへ、平次の女房のお静はそつと顔を出しました。相変らず若くて内気で可愛い女房ぶりです。

「なんだ」

「お客様ですが――」

「お客様？ どなただ」

「それがわかりません。真っ蒼になって顫えて<sup>ふる</sup>居るようですが」

「お勝手か」

「え」

平次は黙って立ち上がると、女房を掻<sup>か</sup>きのけるように、お勝手へ顔を出しました。そこには誰もいません。

二月の町は宵<sup>よい</sup>ながら冴<sup>さ</sup>え返って、戸をあけたままのお勝手の土間に、冷たい月の光が一パイに射している中には、お静の言う真っ蒼になって顫えているお客は愚<sup>おろ</sup>か、顔馴染<sup>かおなじみ</sup>の野良犬も来てはいなかったのです。

「八」

「へエ」

たったそれだけの号令で、八五郎は疾風しつぷうのように馳かけ出しました。贗金造りを縛った褒美で、三浦屋の高尾の身請みうけでもするような氣でいる空想家のガラッ八ですが、一面にはまた銭形平次の助手として、辛辣しんらつきわまる実的な闘士でもあったのです。

間もなく路地一パイの騒ぎを展開しながら、八五郎は一人の若い男を引摺ひきずるようにして戻って来ました。

「この野郎、逃げようたつて逃がすものか。さア、真っすぐに歩け」

「行きますよ、親分、——逃げも隠れもしません。どうせ銭形の親分にお願ひするつもりで来たんですもの」

「何を言やがる、——そんなら逃げるわけはないじゃないか」  
八五郎に小突かれながら来るのは、二十三四のめくら縞しまの半纏はんてんを着た、小柄で、色の黒い、小商人風こあきんどの男でした。

「八、何という騒ぎだ。御近所の衆がびっくりするじゃないか」  
平次は見兼ねて戸口から声を掛けます。一国者の八五郎は、お勝手を覗いて逃げ出したという男を、縛り上げ兼ねない見幕だったのです。

二

「いったい何どうしたというんだ。——お前さんはお勝手を覗いて、俺に逢いたいと言ったんだろう」

「へエ」

「それが急に逃げ出すからこんな騒ぎになるじゃないか」

若い男を家の中に入れると、銭形の平次は打ち解けた調子でこう問い進むのでした。

「相済みません。——私は急に怖こわくなりましたんで、へエ——」

若い男はようやく口を開きました。

「何が怖おそかったんだ。俺はそんな怖い顔をした覚えはないが——」  
平次はツイ破顔はがん一笑します。まだ三十を越したばかり、にっこりすると飛んだ愛嬌のある平次の顔が、脅おびえ切った相手の男の心持を柔やわらげたようでもあります。

「——なまじつか、私が言いさえしなければ、誰も知る筈はずのないことを、面喰めんくらって余計なことを言って、巻き添えになるのが恐ろしゅうございます」

「何んの巻添えなんだ。——正直に話したらお前さんの迷惑になるようにはしない。詳しく話くわして見るが宜い」

「染吉が殺されていたんで、へエ——、驚ろいたの驚かないのって——」

突然そんな事を言って、若い男はそつと後ろを見廻します。

「染吉が殺された？」

このあわてた男の口から、事件の実相をつかみ出すのは、銭形の平次にしても、容易ならぬ仕事でした。

この男は勇太郎という湯島のささやかな炭屋の亭主で、幼おさな友達ともだちの染吉というのと、今日の夕刻妻恋ゆうこくつまこい稲荷いなり様の前でハタと逢い、しばらくその前の空っぽの茶店の縁台で話して別れたが、家へ帰ってフト商売用の秤はかりを忘れて来たことを思い出し、稲荷様の茶店まで引返して見ると、染吉は縁台に腰を下ろしたまま、頭を打

ち割られて、血だらけになって死んでいたというのです。

「——驚いて銭形の親分さんのところまで飛んで来ました。銭形の親分さんなら、染吉を殺した本当の下手人をわけもなく見付けて下さるだろうと思つたからでございます。お勝手口から覗いて、お神さんに取次は頼みました、——考えて見ると、私と染吉が妻恋稲荷様の縁台でしばらく話していたのを、お月様の外には誰も見たわけではなく、このまま黙っていさえすれば、私は何んの関係もない人間で涼しい顔をして居られます。面喰つて余計なことを申上げ、巻添を喰うのは馬鹿馬鹿しいことだと思つて、急に逃げ出す氣になりました」

若い男——炭屋の勇太郎は、ガタガタ顫えながらようやくこれだけの事を話したのです。

「それっ切りか」

ガラッハは後ろから少し荒っぽい声を掛けました。

「それっ切りでございます。尤も、私の秤は死骸の傍にも見えませんでした。あわてて何処かへ振り落したのでございましょう」

「染吉と、どんな話をしたんだ。——そいつを聴こう。——いや、どうせ現場へ行くんだから歩きながらの方が宜い」

平次は手早く仕度をして飛出すと、大根畑への道を急ぎながら、勇太郎の答えを促しました。

「いろいろ意見を申しました」

「意見というと？」

「染吉と私は湯島に生れて湯島に育つて、本当の幼な友達でございます。私はこの通り分別も工夫もない人間で、親譲りの小さい炭屋を、後生大事に守っておりますが、染吉は働き者で派手好き

で、親譲りの縫箔屋ぬいはくやを嫌い、いろいろ儲もうかり相そうな仕事に手を出して、派手な暮しをしておりましたが、そのために内輪が苦しくなるばかりで、近頃はひどい借金に悩んでおりました。久し振りで逢おさななじみった幼馴染の私は、自分の廻らない智恵も忘れて、ツイ意見がましい事も申したわけでございます」

「フム」

「すると染吉は、近頃いろいろ考えた末、危い商売とフツツリ縁を切って、本当に堅気かたぎになるつもりだから安心してくれと申します。私は——儲けるより溜める方が早い——というと染吉は『俺も今になってつくづく悟さとった。——いずれ銭形の親分のところへでも行って、詳しく申上げ、悪い事から足を洗いたいが、お前は銭形の親分を知っているなら一緒に連れて行ってくれ——』と斯こう申しておりました」

「それから」

「一度は薄情な仕打ちもした許嫁いいなづけのお芳にも、今晩は逢って心から詫をするつもりだ。長いあいだ悪い夢を見たが、お芳はこの染吉を勘弁してくれるか知ら？——と染吉はそんな事を言っておりました」

「お芳というのは？」

「妻恋坂の荒物屋の娘で、染吉の許嫁でございました」

そう言う勇太郎の調子には、言うに言われぬ深い感情のあるのを、平次は見逃さなかったのです。

「お前とは関係はないのか」

「飛んでもない、親分さん、私などが——」

パツと赤くなる勇太郎の初心うぶさは、この三人の関係の並々でな

かったことを白状しているようでもあります。

### 三

妻恋稲荷の前の茶店——昼は婆さんが一人今戸焼の狸のように番人をしておりますが、日が暮れると自分の家へ引揚げて、莫塵もくじんや毛氈もうせんを剥はいだままの縁台が、淋しく取残されているところに、染吉の死骸が月の光に照らされて、浅ましく横たわっているのです。

往来から少し離れているので、幸い弥次馬の眼にも触れなかつたらしく、平次とガラッ八が、勇太郎を追つ立てるようになして行つた時は、何もかも勇太郎が発見した時のままになつておりませんでした。

「こいつはひどい」

八五郎が思わず尻ごみしたのも無理はありません。染吉の死骸は縁台の下に滑り落ちて居りますが、後ろから重い物で、頭を一つ思いに叩かれたらしく、よく剃そつた月代さかやきから鬢びんにかけて、血潮に染んでこと切れているのです。

「物も言わずに死んだことだろうな」

平次はそう言いながら死骸を引起して、いろいろ調べております。

「何んで打ったんでしよう」

ガラッ八はその辺を捜しましたが、兇器きようきになるような石も棒も見当らず、反つて染吉の持物だったらしい、贅沢ぜいたくな羅紗らしゃの紙入が見付かりました。

「中に何かがあるか見た上で、お前が預かって置いてくれ」

平次は声をかけました。

「何んにもありませんよ」

「抜かれたんだろう」

「これが目当ての泥棒ですかね」

「いや、そんなことじゃあるまいよ。泥棒ならこんな結構な煙草入を盗らずに行く筈はない」

平次は染吉の死骸から抜いたきんからかわ金唐革の恐ろしく金のかかったらしい煙草入を月の光りにすかししました。

「大変な品ですね」

「フーム、こんな物を持つのは、江戸でも名のある町人かだいっとう大通、でなければ余っぽど思いあがった人間だ。——おや、煙草入の中に小判が二枚入っているよ」

平次は小判を月光りにすかして、ヒョイと重さを引いて見ましたが、元の煙草入に納めて、自分の懐ふところに入れました。その頃から唯ならぬ物の気はいに驚いて、近所の衆や往来の弥次馬が、次第に集まり、町役人なども駆けつけて来ます。

「それにしても贅沢な人間ですね」

ガラッ八は月の光や、次第に集まってくる提灯の光りの中で、死骸を眺めながら、こんな遠慮のない事を言うのでした。

見る蔭もない死に様ですが、染吉というのは余っぽどの洒落男しやれだったらしく、妙に金のかかった身の廻りや、身だしなみの良い小意気な男っ振などを見ると、女で問題を起し兼ねない様子です。

一と通り検屍が済んだのはもう亥刻よつ近いころ、平次は紙入と煙草入だけを、二三日借りることにして、現場を引揚げました。

「八、ちよいと附き合つて見ないか」

「一杯やらかすんでしよう、へッ、へッ」

「馬鹿だなア、附き合えつて言えば、飲むことだと思つてやがる。染吉殺しはまだ目鼻もつかないじゃないか。明日の天道様てんとうさまの出て前に、もう少し当って置きたいところがあるんだ」

「へッ、附き合いますよ。——酒は御免を蒙こうむるが、憚はばかりながら御用と来た日にゃ、夜が明けたつて日が暮れたつて驚きやしません」  
「急にいきり出すじゃないか、——飲み損そこねて口惜しかろうが、そんなに十手なんか突張らかさなくたって宜いよ」

そう言いながら、平次が叩いたのは、妻恋坂の荒物屋の戸でした。

そこには六十を越した父親の周吉しゅうきちと、十九になったばかりの娘のお芳と二人っ切り、夜更けに顔見知りの御用聞——銭形平次に飛込まれて、さすがに胆きもをつぶした様子です。

「これは親分様方」

周吉はあわてて引っかけたらしい半纏はんてんの前を合わせながら、すっかりオドオドしております。後ろから行燈あんどんを持って来たのは、まださすがに昼のままの、身だしなみを崩さないお芳。十九というにしては少しふけて、賢かしこそうな浅黒い顔、キリリとした眼鼻立は決して美しくはありませんが、何んか知ら一度見た者の記憶に焼きつく特徴とくちょうを持っております。

「染吉が殺されたんだが、知って居るだろうな」  
平次は短兵急でした。

「あの騒ぎですもの、よく知っておりますよ。でも、年寄と若い女の見るとななものじゃありませんから、お芳も外へは出しませ

ん」

周吉の調子には、年寄らしい用心深さがあります。

「染吉は今晚お芳と逢う約束だったそうだな」

「そんな事が親分——」

あわてて弁解する父親の袖をそつと引いて、

「父さん、皆んな申上げた方が宜いでしょう、——染吉さんは久しぶりで逢って話したいことがあるから、父さんには内証ないしよで、私に酉刻半頃むっ（七時）お稲荷様まで来るようにと、酒屋の小僧さんに頼んで伝言ことづてをよこしました」

お芳の顔はさすがに緊張きんちやうに蒼くなります。

「行ったのか」

「ハイ、父さんの御機嫌がむずかしくて、家を出られないんで、少し遅れて行つて見ると」

「——」

「親分さん方が、染吉さんの死骸を調べているところでした」

「その前は確かに出なかったのか」

「出やしません。出しもしなかったので、へエ」

周吉は頑固がんこらしく口を入れます。

「染吉とお芳さんが、許嫁だったという噂があるが、本当かい」

「飛んでもない、親分。あんな道楽者のところへ、大事の娘をやるわけはありません。尤も昔もつとはあんな男じゃありませんでした。

この私も娘をやる気になったことがあります——」

「どうだいお芳さん」

平次は周吉に構かまわず、お芳に問い進みました。

「一年前、そんな話もありました。でも、近頃の染吉さんは——」

お芳の顔には、悩ましさが雲の如く湧きます。

「勇太郎は染吉と張り合ったんじゃないのか」

「あの人は正直で気の良い人です。一時染吉さんと面白くない事があったても、それを根に持つような人じゃございません」

お芳は寧ろ勇太郎に好意を持っているらしく、躍起<sup>やつき</sup>となって弁解<sup>むし</sup>します。

#### 四

「親分、何んにもわかりませんよ。この上は勇太郎を縛って、二三束<sup>ぞく</sup>叩いて見るんですね。江戸一番の正直者見たいな顔をして居るだけにあの男には臭いところがありますよ」

いろいろの情報を集めさせにやった八五郎は、翌る日の昼過ぎにフラリと帰って来ました。

「そんなわけには行かないよ。本当に勇太郎が下手人<sup>げしゅにん</sup>なら、あんなにあわてる筈はない。それにあれだけの傷を拵<sup>こさ</sup>えたんだから、下手人はうんと血を浴びる筈だ。勇太郎にはそんなものはなかったぜ」

平次は落着き払っております。

「家へ帰って着換えて来る術<sup>すべ</sup>もありますよ」

「そんな落着いたことの出来る男じゃない」

「でも、勇太郎の秤<sup>はかり</sup>は見付かりましたよ、分銅<sup>ぶんどう</sup>にはうんと血が附いて――」

「どこで見付かったんだ」

「町内の若い者が妻恋稲荷の後ろの藪<sup>やぶ</sup>で見付けたんで」

「秤はかりと分銅と一緒にになっていたのか」

「秤の先へ分銅を縛ってあったそうです」

「フーム」

「これだけでも、三輪の親分なんかの耳に入ると、勇太郎を縛りますよ」

「家へ帰って着物を換えるほどの落着きがあるなら、分銅くらいは洗って置きそうなものじゃないか。現場のすぐ近くへ、血の附いたまま捨てて行くのは、下手人はこの秤はかりの持主ではないと言っているようなものだ。勇太郎はそれほどの馬鹿じゃあるまい」

「そうですかね」

平次の論理の前に、ガラッ八は小首を捻ひねるばかりです。

「お芳はどうした」

「世間では何んとか言うが、あの娘は人を殺すような人間じゃありませんよ。染吉はお芳の生真面目なのが嫌になって、この一年ばかり前から、丸山町の直助のところへ入りびたって、その妹のお辰というのに夢中になっているが」

「丸山町の直助——聞いた事のない名だな」

「出来星できぼしの金持ですよ。米相場で儲もうけたとか言って、大変な景気で、その妹のお辰はまた、小格子から引っこ抜いて来て、装束しょうぞくを直したような恐ろしい女ですぜ」

「いずれそいつは後で当って見よう。ところで、俺の方は大変なものを見付けたよ」

「何んです、親分」

「これだ」

平次はゆうべ染吉の死骸から持って来た、金唐草きんからかわの煙草入を出

して、中から二枚の小判をつまみ上げます。

「小判がどうかしたんで」

「こいつは銅物だよ」

「えッ」

「近ごろ江戸中を騒がせている銅脈さ。一寸見は真物の小判と少しも違わない。——尤もこちとらは、滅多に小判を見ることがもないが、——両換屋へ持って行つて、丁寧に見て貰うと、こいつは良く出来ているが全くの贋物だ」

「へエ——」

「殺された染吉が、悪事から身を退いて、俺のところへ来ると言っていたそうだな」

「勇太郎はそんな事を言いましたね」

「その途中で殺されたのかも知れない。——ありそうな事だ。殺した奴は染吉の財布ばかり覗いた。その中の物を皆んな奪ったのは、小粒や、青銭まで欲しかったわけじゃあるまい。下手人は、染吉の持っているこの贋物の小判を奪るつもりだったかも知れない」

「——」

飛躍する平次の天才、その推理の塔の積み重なるのを、八五郎は呆氣に取られて聴き入るばかりです。

「ところが、染吉は用心して、大事の小判を煙草入の中へ入れた。

——羅紗の結構な紙入を持っていて人間が、腰にブラ下げる煙草入などに小判を入れる筈はない。その煙草入は三両や五両で買えるような品じゃないんだから、不用心ばかりでなく煙草入もいたむ」

「八、こいつは面白くなつたぞ」

「何が面白いんで？ 親分」

八五郎は四方をキョロキョロ見廻します。二月の陽は縁側にカツと射して、貧しい平次の住居を隈なく照らし出しますが、別に八五郎の眼には、面白くなるようなものありません。

「染吉は贋金造りか、贋金遣いを知っていたのかも知れない。――縫箔屋を止してノラクラ者になつた染吉が、こんな贅沢な暮らしをしているところを見ると、どうかしたら、染吉もその贋金遣いに関係を持っていたのかも知れないよ」

「近ごろ何にかのわけがあつて、贋金遣いの仲間が恐ろしくなり、自首して出て、自分の罪だけでも許して貰おうとしている矢先、仲間の者に嗅ぎ付けられて、一と思いに殺されたんじゃないか。――俺にはどうもそんな匂いがしてならない」

「染吉を殺した下手人は、余っぽど染吉と昵懇な奴だ。――染吉の後をつけて来て、妻恋稲荷で勇太郎と話すのを盗み聞きしたんだろう。染吉が自首するに違いないと見て取つて、勇太郎の姿が見えなくなるとすぐ染吉のところへ姿を現わし、馴々しく話しかけながら、勇太郎の忘れて行った秤で力任せに殴つたんだろう。秤に分銅を縛つてあつたというから、こいつは恐ろしい得物だ、手もなく宝山流の振り杖さ」

「そこへ勇太郎が帰つて来たので、秤を藪に投り込んで、下手人

は逃げ出した。恐ろしい奴だ」

「誰でしょう。その下手人は？」

「解らない。まるっ切り解らない。とにかく、染吉の繁々<sup>しげしげ</sup>出入りする家を探すことだ」

「差当り丸山町の直助はどうです」

「行つて見よう。無駄かも知れないが」

平次とガラッ八は、そこから真つすぐに、丸山町に飛んだことは言うまでもありません。

## 五

丸山町の直助の家は、崖<sup>がけ</sup>の上に建った立派な家で、構えも木口も相当、後ろに竹林があつて、前に五六軒の長屋を並べ、その家賃だけでも呑気に暮せそうな様子です。

不意に訪ねると、幸い主人の直助も、妹のお辰も顔を揃えておりました。直助は三十を越した、愛嬌のある好い男、少しばかり<sup>かみがたなまり</sup>上方訛のあるのも、上手な商売人らしい印象を与えます。

「銭形の親分さんでしたか、それはどうもお見それ申しました。

私は御当地へ参つてまだ三年と経ちませんので、土地の方にも馴<sup>な</sup>染<sup>じみ</sup>が薄うございます。——染吉さんが殺されたそうで、へエ、へエ、人から聞かされてびっくりいたしました。私も湯島のお宅へ顔だけ出して参りましたが気の毒なことでございます。気持の好い方でしたが、——近頃はよく此処へも見えました。現に昨日もおいでで、昼過ぎまで話して帰りましたが——」

そう言った滑<sup>なめ</sup>らかな調子。

染吉との関係は商売のことから懇意こんいになり親しく往来しているうちに、妹のお辰を嫁に欲しいという話になり、本人も大方承知していたが、具体的な話を進める前にあんな事になって、お辰も力を落している——というのです。

話の中に、妹のお辰も出て来ました。二十一二の年増盛りで、お芳の野暮やぼつたい様子に比べくらると、お月様すづほんと鼈かめほどの違い。身の廻りの贅ぜいはとにかく、厚化粧で、媚沢山こびだくさんで、話をしても愛嬌がこぼれそう。

「まあ、本当に、染吉さんは、お可哀そうに。私はもう、死んでしまいたいと思いました」

そんな事を言いながら、涙を拭いたり、兄の直助の身の廻りの世話をしたり、所作沢山さくさくにしているのです。

「ゆうべは外へ出なかつたろうな」

平次は委細いさい構かまわず調べをつづけました。

「妹と二人、一杯飲んで、好きな小唄けいこの稽古けいこをして、早寝をしてしまいました。——尤もつとも、私の出入りは必ず前のお長屋の中を通りますから、その辺で訊いて下さればよく解ります。外に道はございません」

そう言われるとそれっ切りの事です。

それにしても調度の見事さ、暮しの豊かさ、ここの生暖かい空気に包まれて居ると、平次も八五郎も何にかうっとりした心持になります。

「江戸には滅多めったに見られない家だが、ちよいと家の中を見せて貰えまいか」

「へエ、どうぞ、親分方が御覧になるような家ではございません

が」

直助は気軽に立って、平次と八五郎に家の中を見せてくれました。中は贅を尽しておりますが、至って簡単で明るくて、贗金等にせがねを造る場所があるとも思えず、そんなものを貯えておく様子もありません。

「二階は？」

「富士山に見えるのが自慢でございますが、あの通り孟宗竹もうそうだけが伸びて、せっかくの眺めを台なしにしてしまいました。いずれ竹を切ってしまうつもりですが――」

指差すと、小石川一帯の町を眼下に眺めて、その上に富士も見える景色ですが、崖がけの竹林がひどく繁しげって、すっかりその眺望を隠しております。

そこを出た平次とガラッ八は、前の長屋で一通り直助兄妹のことを訊いて、それから湯島を廻って、殺された染吉の家へ立寄り、線香を上げて様子を見ました。集まったのは近所の衆と、昔染吉の先代が使った縫箔ぬいはくの職人だけ。耳の遠い婆さんと染吉とたった二人の世帯は、主人が死ぬと火の消えた淋しさです。

近所でいろいろ噂を集めました、贅沢で人を人臭いとも思わない染吉には、相当に反感があり、突っ込んだことは誰も知りません。

「親分、下手人は誰でしょう」

ガラッ八はとうとう考え草臥くたびれました。

「まだ解らないよ」

「勇太郎じゃなしお芳でないとすると、やはり直助じゃありませんか」

「どうして、そんな見当をつけたんだ。——直助は昨夜外へ出なかつたんだせ」

「でも、あの男は油断ゆだんがなりませんよ」

「前の長屋で、直助兄妹は昨日の昼過ぎから外へ出ないと言ってるじゃないか。それも五人や三人の口が揃ったのじゃない、——三味線と小唄も聴えていたというし」

「でも、変じゃありませんか、親分」

「何が変なんだ」

「何んとなく変ですよ」

八五郎はキナ臭いものを嗅ぎ出すように鼻の穴を大きくしました。

「それは斯こうさ、あの直助とお辰は、兄妹じゃないんだ。俺には初めからよく判った」

「へエ——」

平次の言葉は予想外です。

「お前の眼にも変に映うつつたらしいが、兄妹でないと見破ることは出来なかつた。ただ、兄という直助と、その妹というお辰の取廻しが変に見えたんだ。——川柳せんりゅうにはうまいのがあるよ。『それなくてあの所置振りがなるものか——』ってね。妹があんなに兄の世話が焼けるものか。吸い付け煙草などは兄妹の中ですることじゃないよ」

「すると」

「二人は夫婦さ」

「染吉がお辰に夢中になったのは？」

「直助が承知で釣つつたんだらう。——とにかく、あの男の稼業かぎようを

もつとよく知りたい。気の毒だが下つ引を四五人狩り出して、直助の身許と身上と商売のことを、もつとよく調べ抜いてくれ」

「へエ」

ガラッ八は拳こぶしを放れた鷹たかの様に、どこともなく飛んでしましました。

## 六

それから三日目。

「大変ッ、親分」

「サア、来やがった。どこで大変を拾って来たんだ」

あわてて飛込んで来る八五郎を迎えて、平次は何やら期待にニヤリニヤリしております。

「三輪の親分が乗込んで来て、丸山町の直助の家を根気よく家探ししましたぜ」

「何にか出たかい」

「何んにも出ないから不思議で、——出たのは真物の小判が三百両ばかり」

「それから」

「三輪の親分もすごすごと引揚げましたよ。床下も天井も剥はがし、井戸を覗いて庭まで掘ったが、口惜くやしそうでしたよ、三輪の親分の顔が」

「それっ切りか」

「それっ切りです。でも三輪の親分が目をつけるようじゃ油断がなりませんね」

「お前の調べはどうだ」

「直助は米相場のコの字も知りませんよ。上方で儲けたような事を言っているが、三年前江戸へ来た時は裸はだか一貫で、それから何をするでもなく金が出来て、妹いもうとというのを呼寄せてあの豪勢な暮しが始まったそうで」

「フーム」

「あのお辰というのは恐ろしい腕で、今まであの女に釣つられて出入りした男が幾人あったかわからないが、それが順々に来なくなって、近頃は染吉ともう一人、中年者の男がちよいちよい来るそうですよ」

「そんな事だろうよ」

「早くあの野郎を縛って下さいよ、親分。三輪の親分に先手を打たれちゃ業腹ごうはらじゃありませんか」

ガラッ八は一生懸命に説き立てました。

「証拠は一つもない。贖金にせがねが一つでもあの家にあれば縛れるが、——でなきや、あの晩、直助が外へ出たと判れば——」

「行って見ましよう、親分。ここで考えたって何んにもなりませんよ」

「そうしうか」

平次はとうとう出かけました。甚はなはだ自信のない姿です。

丸山町へ行って崖がけの下の方から見ると、直助の家は竹林の上に屋根だけ見えますが、竹林の中には人間の歩いた様子はなく、第一、竹林の外の枳殻垣からたちがきは、見事に繁って猫の子ももぐれそうにはありません。枳殻垣の外には椎しいの樹が二三本、それは近所の洗濯物の干場に利用されてあります。表へ廻ると、直助とお辰はける



りとして迎えました。

「たびたび御苦勞様で——、二階から今日はよく富士が見えます。邪魔な竹の芯<sup>しん</sup>を止めて、よく眺めのきくようにしました。どうぞ」

直助兄妹が先に立って二階へ案内します。なるほど障子<sup>こずえ</sup>を開けると、庇<sup>ひさし</sup>に冠さるように繁った竹を十本ばかり、梢<sup>こずえ</sup>の方二三間切ってしまつて、下枝は青々と残したまま、その上から小石川の高台も富士も見えるようにしてあります。

「この通り良い眺めになりました」

直助は縁側から彼方此方を指します。

「このあいだ三輪の親分が来たそうだな」

「へエ——、家捜しには驚きました。何んにもあるわけはございませんが」

直助は酔っぱい顔をするのです。

その間にお辰は茶を入れて、厚切の羊羹ようかんとこぼれるばかりの愛嬌とを一緒に持って来ました。

「親分さん、どうぞ」

品しなをつくって七三に平次とガラッ八を眺めると、背筋をゾクツと無気味なものが走ります。

「八、昨夜の風はひどかったなア」

平次はいきなり不思議なことを言い出しました。

「へエ——」

「主人にお願いしてあの先を切った竹を二三本頂戴したい。風でひどく痛められたようだから、お前は近所の植木屋へ行つて、親方を引っ張つて来てくれ」

「へエ——」

何が何やら、わけも解らずに立上がる八五郎、それを追つて、梯子段のところで、平次は何やら囁ささやきました。

やや暫らく、直助と平次の、気まずい対立はつづきます。一度下へ行つたお辰は、この時そつと登つて来て、直助の後ろに寄り添います。

下の方へは八五郎の手が廻つて、間もなく町内の植木屋が来た様子。

「どの竹を切るんですか」

そんな大きな声が聞えます。

「芯しんを止めた竹を切るんだ」

上から平次。

「いや、切っちゃならねエ、主人の俺が不承知だ」

いつの間にやら脇差を左手に持った直助は平次の横手から狙

い寄って居るではありませんか。振り返ると梯子段の上には、雌猫ねこのようなお辰が、これもあいくち首を逆手さかてに不気味な薄笑いを浮べて立っております。

「気が付いたか、直助」

平次は平然として、十手も出しません。

「野郎ッ」

サッと切りかける直助、引外して、平次の手から、二三枚の投げ銭が飛びます。

「あッ」

と、たじろぐ直助。それを見ると、後ろからお辰は雌豹のように飛付きます。

争いは一瞬にして決しました。平次がお辰を膝の下に敷いたとき、直助は二階の縁側から竹に飛付いて、真に猿のように、竹から竹を伝わってからたちがき枳殻垣を越え、しい椎の樹きを滑降すべりおりて、下の往来に立ったのは、思いも寄らぬ見事な体術です。

しかし、直助にも違算がありました。往来へ飛降りると同時に、身体そなえの備もきまらぬところへ、

「御用ッ」

何処に隠れていたか八五郎のガラッ八、一世一代の糞力くそぢからを出して、むんずと組み付いたのです。

×

×

植木屋の鋸のこに従って切倒される竹からは、がんぞう贗造の小判がゾロゾロと出て来ました。平次に睨まれ、三輪の万七に脅おどかされた直助は、手元に証拠の偽小判をおく危険を覚さとりましたが、その時はいもう持出す機会を失してしまったので、二階からの眺望のためと言

い触して、太い孟宗もうそうを十本あまりも途中から切り、上から鉄の棒で節を抜いて、大地に生えた儘の生竹に、実に八千両という贋造小判を隠したのです。三輪の万七はそれを見付け兼ねましたが、竹の切りようの異常なのと、昨夜の風で、梢のない葉の少い竹が反って吹き歪ゆがめられているのを見て、平次は咄嗟とつさに偽小判の隠し場所を発見したのです。

直助兄妹が極刑きょつけいに処せられ、その相棒で、小判を贋造していた飾り屋の安というのも捕われて後、

「今度はお前にもよく判るだろう、絵解きにも及ぶまい」

と言うと、八五郎は、

「偽金の方はそれでわかるとして、直助が染吉殺しの下手人と解ったのは？」

と訊きました。

「お辰が直助の妹でないと判った時から怪しいと思ったよ。それから、長屋の衆は三味線と小唄は聴いたが、それが直助やら、お辰やらはつきりした事は判らなかった。——もう一つ、直助の腕と身体を見て、この男なら、竹から竹に伝わって枳殻垣からたちがきが越せると思ったんだ。——染吉を殺したのは、極く懇意な男だ、勇太郎か直助の外にはない」

「——」

「お辰を囷おとりに染吉を騙だまして偽金遣いの手先にしたが、だんだんうるさくなって、変な様子を見せたので、染吉は寝返る気になったんだろう。——夫婦者がいつまでも兄妹の真似は出来るものじゃない、今までもその手でさんざん使われた上二三人は殺されたらしい」

「お芳は？」

「あの娘は勇太郎と一緒になるだろうよ、似合の夫婦じゃないか。  
——儲<sup>もう</sup>けるより溜める方が早い——」と言ったね、良いことを聴いたよ、俺も少し溜める気にでもなろうか。ハハ、ハッハッハッ、尤も贋金使いを縛った褒美の金は、八五郎が貰うことになっているよ。今度はバラ撒<sup>ま</sup>かずに溜めておくが宜いぜ」

平次は女房のお静を顧<sup>かえり</sup>みて蟠<sup>わだかま</sup>りもなく笑いました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十八年二月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷 河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



## 銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>